《資料》

竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

――和歌を主題とする組香（八）――

矢野　環
福田智子

本稿は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介―和歌を主題とする組香（一）―」（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一一月）、「同―同（二）―」（『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月）、「同―同（三）―」（『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月）、「同―同（四）―」（『社会科学』第47巻第2号、二〇一七年八月）、「同―同（五）―」（『社会科学』第47巻第3号、二〇一七年十一月）、「同―同（六）―」（『社会科学』第47巻第4号、二〇一八年二月）、「同―同（七）―」（『社会科学』第48巻第1号、二〇一八年五月）に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、御の巻から、恋艸香、梅がゝ香、夘花香、三體和歌香、新時雨香、三詠香の、計六つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、「《資料》竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介」（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには〝」〟を付して丁数を記す。

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、（2）で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2（角川書店、二〇〇三年）に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《御巻―一一》恋艸香

【翻刻】

△（朱）恋艸香

業平朝臣

いせ物語
忘草おふる野邊とは見るらめとこは忍ふなり後も頼まん

此古哥を以て組たる式也。

一　十炷香の札を用。

一　初草香三包、（一朱）忍草香二包、（二朱）忘艸香二包、（三朱）思草香一包、（ウ朱）都合八包出香とす。四炷充焚終て包紙を開くべし。」御二五オ

一　初草香斗、外に拵へ試に出す。其餘試なし。

一　初草香二包、忍艸香一包、忘草香一包、以上四包打交、初に焚出す。又初草香一包、忍艸香一包、忘艸香一包、思草香一包、以上四包打交、後に焚出す。

一　初草札一の、忍艸札二の、忘草札三の、思艸札ウのをうつべし。

一　香の聞様、記録点かけ様に習ひあり。口決ならては傳へかたし。故に記録荒増左に顕す。」御二五ウ

恋艸香之記　　点口傳

〔表〕」御二六オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一	初草	コ 3＝2＋1…初	
二	忍草	2＝1＋1	口決伝授有
三	忘草	2＝1＋1	
ウ	思草	1＝ 1	

本香*には、「初草」の香三包、「忍草」「忘草」の香、各二包と、「思草」の香一包の、計八包を用いる。「初草」の香のみ試香*を行う。

まず、「初草」の香二包、「忍草」「忘草」の香、各一包を焚き出す（初段）。次に、残りの「初草」「忍草」「忘草」「思草」の香、各一包を焚き出す（後段）。初段・後段それぞれに、四炷*焚き終わったら包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香*札を用いる。「初草」の香には「一」の札、「忍草」の香には「二」の札、「忘草」の香には「三」の札、「思草」の香には「ウ」*の札を打*つと記されるが、「忍草」「忘草」の香は同じく二包ずつ出香*され、ともに試香もないため、聞き分けることができない。巻末の記録例が正しければ、札は、各人の判断で、「忍草」（二）と「忘草」（三）を打つ。そして、初段と後段とのつがい当たりに点を与えるものではないかと思われる。

これらの香の聞き分け方（香の聞様）や、点の付け方については、口決伝授があるという。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『伊勢物語』第百段、一七六番に載る。

むかし、男、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむごとなき人の御局より、忘れ草を、「しのぶ草とや言ふ」とて、いださせたまへりければ、たまはりて、

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなりのちも頼まむ

本組香の口決伝授が、「忍草」「忘草」の聞き分け方にあるというのは、この『伊勢物語』の章段の内容に負うところが大きかろう。

また、同じ『伊勢物語』に関連して、「初草」の歌も次のように見出すことができる。

むかし、男、妹のいとをかしげなりけるを見をりて、

うら若み寝よげに見ゆる若草を人のむすばむことをしぞ思ふ

と聞えけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるかな　『伊勢物語』第四十九段、九〇・九一番

一方、「思草」の和歌における用例は、夙に『万葉集』に見える。

草に寄する

道の辺の尾花が下の思ひ草今更々に何をか思はむ

『万葉集』巻第十、二二七四（二二七〇）番

「草に寄する」という題詞をもつこの万葉歌の後世への影響は大きく、平安期には、これを踏まえた和泉式部の詠がある。

のべみればをばながもとの思草かれゆく程になりぞしにける　『和泉式部集』二七六番

この和泉式部の歌は、この後、『新古今集』巻第六冬歌（六二四番）に、第四句「かれ行く冬に」の本文で収められた。『新古今集』は他にも、先の万葉歌を踏まえた当代歌人、通具の作を載せている。

（題しらず）　右衛門督通具

とへかしなをばながもとのおもひぐさしをるるのべの露は

いかにと　『新古今集』巻第十五恋歌五、一三四〇番

このように、「思草」は、とくに「尾花がもとの思草」という表現で、鎌倉期以後、江戸期に至るまで長く享受され続けるようである。本組香には「尾花がもと」という表現は採られていないが、「思草」を詠んだこの万葉歌の表現継承の系譜を背景に、本伝書も創作されたのであろう。

《御巻―一二》梅がゝ香

【翻刻】

△（朱）梅がゝ香　　よみ人しらす

古今集
梅の花それとも見へす久堅のあまぎる雪のなへてふれゝは

此哥に因て組侍りたる也。

一　試なし。

一　十炷香の札を用。

一　一二の香、各三包充、三の香一包、都合七包の内、六包出香」御二六ウ とす。皆焚終て包紙を開くべし。

一　一二の香六包打交て、其内一包除け、三香一包加へて、又六包として出香とす。

一　無試十炷香のごとく聞く也。

一　記録点は各一点充、独聞は二点充也。褒美を聞の下に認る。其名目左のごとし。

一の香皆中（朱）　梅の花」御二七オ

二の香皆中（朱）　久堅の

三の香斗中（朱）　なへて降れは

皆中（朱）　梅

一の香不通（朱）　それとも見へす

二の香不通（朱）　あまぎる雪

一　記録認様末に記す。」御二七ウ

梅がゝ香記　一ノ香除（朱）

〔表〕」御二八オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一　二　3－1　三　1　6

*本香には、「一」「二」の香、各三包と、「三」の香一包の、計

七包を用意する。このうち「一」「二」の香、計六包から一包を除いて五包とし、これに「三」の香一包を加えて六包を出香する。試香はない。六炷すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香札を用いる。無試十炷香の要領で、一炷目には「一」の札を打ち、二炷目以降は、同香には同じ札を、異香にはその度に「二」「三」の札を順に打っていく。

記録点は、独り聞きは二点、二人以上では一点である。

記録の最下段には、褒美のことばを記す。すなわち、すべて聞き当てると「梅」と書く。また、「一」の香について、すべて聞き当てると「梅の花」、一炷でも聞き違えると「それとも見へす」と記し、同様に、「二」の香をすべて聞き当てると「久堅の」、一炷でも聞き違えると「あまぎる雪」と書く。「三」の香一炷については、聞き当てると「なへて降れは」と記すが、聞き違えたときに記すことばはない。すべて聞き当てたときの「梅」は単独で記すことになるが、「梅の花」以下のことばは、聞き当てた香、聞き違えた香の種類によっては、複数のことばを組み合わせて記録する。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『古今集』冬歌、三三四番に載る。

（題しらず　よみ人しらず）

梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば

この歌は、ある人のいはく、柿本人まろが歌なり

雪中梅の歌である。雪が降って空一面がくもり、白梅がどこに咲いているかもわからないという、白一色の情景を詠んでおり、組香の題である「梅が香」を主題とする歌ではない。その点ではむしろ、『古今集』において当該歌の次に配されている小野篁の歌の方がふさわしかろう。

梅花にゆきのふれるをよめる　小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりて見えずともかをだにほへ人のしるべく

『古今集』巻第六冬歌、三三五番

本組香が、『古今集』三三四番歌をあえて取り上げたのは、「褒美」のことばとして、「一」「二」の香の各二炷、「三」の香の一炷をそれぞれ聞き当てると「梅の花」「久堅の」「なへて降れば」、「一」「二」の香を一炷でも聞き違えると「それとも見へず」「あまぎる雪」というように、五句を対にして用いるという着想を得たことによるのであろう。すべて聞き当てた場合に「梅」一文字を書くのは、雪の中に「梅」を見出したいという心情を象

徴的に示している。また、試香がないというのは、「それとも見へず」という句に依拠した趣向であろうか。

ともあれ、本組香の発想の根底には、『古今集』三三五番歌に典型的に見られるような、「見えずとも」「かをだににほへ」梅の花という表現類型が存しており、その情趣を本組香にも汲み取るべきであろう。

《御巻―一四》卯花香

【翻刻】

△（朱）卯花香

拾遺集　源順

我宿の垣根や春を隔らん夏きにけりと見ゆる卯の花

此哥をもつて組侍たる也。

一　十炷香の札を用。

一　春の香、夏の香、各二包充、垣根の香三包、卯の花の」御三〇ウ香ウ香なり一包、都合八包の内、七包出香とす。

一　春夏の香斗、外に拵へ試に出す。

一　春夏香、四包交て、其内一包除け、残三包に垣根と卯の花との四包を加へ、以上七包を一炷充焚出し、皆終て包紙を開くべし。

一　春に札一の、夏に札二の、垣根に札三の、卯の花に札ウの打べし。」御三一オ

一　記録点は、春夏の香、何人聞にても一点宛、垣根香、何人にても二点充、卯花の香、独聞四点、二人より三点充也。春の香、二炷ともに出れは、哥を口に認る。又、夏の香、二炷ともに出れは、哥を末に認るなり。記録大概左のごとし。」御三一ウ

卯花香之記　夏除（朱）

我宿の垣根や春を隔らん

夏来にけりと見ゆる卯の花

〔表〕」御三二オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

春　夏　2－1　コ

垣根　3

卯花　1

7

本香には、地香として、「春」「夏」の香、各二包と、「垣根」の香三包、また、ウ香として「卯花」の香、一包の計八包を用意する。このうち「春」「夏」の香のみ、試香を行う。

「春」「夏」の香、計四包の中から一包を除き、残りの三包に、「垣根」の香と「卯花」の香、計四包を加えて、全七包を一炷ず

つ焚き、すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香札[*]を用いる。本伝書には、「春」「夏」「垣根」「夘花」の香に、それぞれ「一」「二」「三」「ウ」の札を打つ[*]と記されているが、試香のない香がふたつ（「垣根」「夘花」）あるため、試香のあった「春」「夏」以外の香が初めて出たとき、それがどちらにあたるのかは判断できない。そこで「三」の札を打ち、それが「夘花」だった場合は、「垣根」の香に「ウ」の札三枚を打つことになる。

なお、「夘花」の香に「ウ」の札を打つという本伝書の記載を重視するならば、あるいは、香会の始めに木所（香木の種類）を公表する「木所聞」か。それならば、木所により、試香のないふたつの香を聞き分けることも可能になる。御家流では時にこの方式が採られる。一方、志野流では、香会が終わってから香名と木所を書いた短冊を披露するのが通常の作法であり、「木所聞」を行うことは決してない。巻末の記録例では、初めに「垣根」を打つ連衆があり、また、「夘花」を打つ連衆もある。しかも、必ず「夘花」は一炷、「垣根」は三炷になっている。執筆が必要に応じて書き換えるのかもしれない。

記録点は、「春」「夏」の香を聞き当てると一点、「垣根」の香では二点が与えられる。これらの香は、何人聞き当てても点数は変わらない。一方、「夘花」の香は、独[*]り聞きでは四点、二人以上聞き当てると三点ずつというように、聞き当てた人数によって点数が変わり、得点が地香より高い。

「春」の香が二炷ともに出た場合は、源順の歌を記録の冒頭に記す。また、「夏」の香が二炷ともに出た場合は、記録の末尾に歌を記す。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『拾遺集』巻第二夏、八〇番に載る。夏部の二首目にあたる歌である。

屏風に　　したがふ

わがやどのかきねやはるをへだつらん夏きにけりと見ゆる卯の花

香名「春」「夏」「垣根」「夘花」は、いずれもこの歌に拠る。「春」「夏」の香の出香数によって、当該歌を記録の冒頭か末尾に記すというのは、卯の花の垣根が春を隔てて夏をもたらすという季節の移り変わりを意識しての趣向と見られる。「夘花」の香を「ウ」香（客香）とするのは、この歌の主題から見ても妥当であるが、花の名にちなんだ指定でもあろう。

《御巻―一五》三體和歌香

【翻刻】

△（朱）三體和歌香

三體和歌抄一部四十二首の内を取て綴

侍たる組也。

一　十炷香札を用。

一　春夏香三包（一朱）、秋冬香三包（二朱）、恋旅香二包（ウ朱）也香、都合八包出香として打交、二炷聞に四度に焚出し、皆終て包紙を開くべし。」御三二ウ

一　春夏の香、秋冬の香、外に拵へ試に出す。恋旅香は試なし。

一　札は、春夏香に（一の札）、秋冬香に（二の札）、恋旅香に（ウの札）打べし。

一　記録は、中り斗を記す。点なし。片中は不認。二炷ともに中たるを記すべし。其名目左のごとし。

春夏〈（朱）　ふとく大きなる體

秋冬〈（朱）　からひほそき體　」御三三オ

恋旅〈（朱）　艶にやさしき體

春夏と秋冬（朱）　とこよの花　又　ほとゝきすとも

秋冬と春夏（朱）　さむしろ

春夏と恋旅（朱）　霞の衣

恋旅と春夏（朱）　ぬれきぬ

秋冬と恋旅（朱）　落葉か上

恋旅と秋冬（朱）　うつの山　」御三三ウ

名目の引哥七首

春　鳫帰るとこよの花のいかなれは月はいつくも同し春の夜　左馬頭藤原親定

夏　夏の夜の有明の空のほとゝきす月よりおつる夜半の一こゑ　寂蓮法師

左大臣良経　」御三四オ

秋　はき原や夜半に秋風露ふけはあらぬ玉ちる床のさむしろ　藤原定家朝臣

春　花盛り霞の衣ほころひて峯白たへの天のかく山　前大僧正慈圓

恋　人しれぬ泪はかりはぬれきぬを夢にほすやとかへしてそぬる　」御三四ウ　鴨長明

冬　淋しさは猶残りけり跡きゆる落葉か上に今朝は初雪　上総介家隆

旅　旅寝する夢路はゆるせうつの山関とは聞す守人はなし

一　記録認様次に顕す。」御三五オ

三體和歌香之記

〔表〕」御三五ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

春夏　　コ
秋冬　　3
恋旅　　2
8＝×4
2

本香[*]には、「春夏」「秋冬」の香（地香[*]）、各三包と、「恋旅」の香（ウ香[*]）二包の計八包を用意する。このうち「春夏」「秋冬」の地香のみ、試香[*]を行う。ウ香の「恋旅」の香には試香はない。

全八包を二炷[*]聞きで四度焚き、すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷[*]香札を用いる。「春夏」「秋冬」「恋旅」の香に、それぞれ「一」「二」「ウ」の札を打[*]つ。

記録には、「片あたり」（片方のみ聞き当てること）は記さず、二炷ともに聞き当てた場合のみ、点ではなく、聞[*]きの名目を記す。二炷の香の組み合わせにより、十の名目が指定されている。

（2）和歌作品との関わり

「三體和歌抄一部四十二首」に依拠した組香である。『三体和歌』は、「三体」（三つの美的様式）を、春・夏、秋・冬、恋・旅の題に配し、各題一首ずつ計六首を七人の歌人が詠んだ、全四十二首を収めた歌集である。作者は、左馬頭親定（後鳥羽院）・藤原良経・慈円・藤原定家・藤原家隆・寂蓮・鴨長明。

『新編国歌大観』所収『三体和歌』には、「題」として次の「三体」が挙げられている。

春　夏　　此二は、ふとくおほきによむべし
秋　冬　　此二は、からびほそくよむべし
恋　旅　　此二は、ことに艶によむべし

本伝書において、二炷ともに「春夏」「秋冬」の香が出た場合にそれぞれ指定されている、「ふとく大きなる體」「からひほそき體」の名目はこれに拠る。ただし、「恋旅」の香二炷の名目「艶にやさしき體」は、「ことに艶に」とする先の記述とは若干異なる。だが、「三体の名称は伝本や資料によっていくらか異なる」（『新編国歌大観』「三体和歌」解題：赤瀬信吾）と指摘されているように、たとえば、『三體和歌』（国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース、書誌ID：１００２４５１４５、書陵部蔵５０１・４０３、デジタル請求記号：ＤＩＧ―ＫＳＲＭ―４１９００―６）では、「恋旅　ゑんにやさしく」とあり、本伝書が拠った本文の存在も知られる。

次に、「名目の引哥七首」の和歌の本文と歌番号を、同じく

『新編国歌大観』所収『三体和歌』に照らして確認する。なお、便宜上、七首の和歌には順に①～⑦の番号を付し、『新編国歌大観』の歌番号は、和歌本文の後に（　）を付して示した。

①　春　　左馬頭親定院御製

かりかへる常世のはなのいかなれや月はいづくもおなじ春の夜（一）

②　夏　　寂蓮

夏の夜の有明の空に郭公月よりおつる夜半の一声（三二）

③　秋　　左大臣

荻はらや夜半に秋風露ふけばあらぬ玉ちる床のさむしろ（九）

④　春　　定家朝臣

花ざかり霞の衣ほころびてみねしろたへの天のかご山（一九）

⑤　恋　　前大僧正

人しれぬ涙ばかりにぬれ衣を夢にほせやと返してぞぬる（一七）

⑥　冬　　鴨長明

さびしさはなほのこりけり跡たゆる落葉がうへの今朝のはつ雪（四〇）

⑦　旅　　家隆朝臣

旅ねする夢路はゆるせうつの山関とはきけどもる人はなし（三〇）

『新編国歌大観』所収『三体和歌』は、歌人ごとに六つの題の歌が配されているが、右の七首の歌をその収載順に並べ換えると、①③⑤④⑦②⑥となる。

さて、二炷聞きで異香が出た場合の名目は、一炷目の香名の漢字二文字のうちの一文字を採り、その題の歌に、それぞれ名目を見出している。たとえば、「恋旅」「春夏」の順に香が出たときは、⑤の「恋」題の歌の「ぬれきぬ」を、また、「秋冬」「恋旅」の香の順だと、⑥の「冬」題の歌の「落葉か上」を名目とする。三種類の香の二炷聞きでは、香の出方の順序を考慮した

異香の組み合わせは六通りなので、春・夏・秋・冬・恋・旅の歌が各一首、計六首あれば、引き歌として足りる。だが、右に列挙した歌を一瞥すれば気づくように、七人の歌人の歌が各一首撰ばれており、「春」以外の題の歌が一首ずつなのに対し、「春」題の歌だけは二首（①・④）ある。このうち①の「とこよの花」は、「夏」題の歌②「ほと、きす」とともに、「春夏」「秋冬」の香の出方のときの名目に指定されている。これはあるいは、季節の巡りが揃った「春夏」「秋冬」の香の出方に、永久に続く「常世」のイメージを重ねたものか。また、①は、「春」題の歌ではあるが、「とこよの花」を、俳句では夏の季語とされる「常世花」（橘の花）と見れば、②の「ほと、きす」との『万葉集』以来の和歌における強固な美的組み合わせを読み取ることもできようか。

《御巻―一六》新時雨香

【翻刻】

△（朱）新時雨香　　源頼實

後拾遺集
木葉ちる宿は聞わく事そなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

此哥によつて組たる也。

一　試なし。

一　十炷香の札を用。」御三六オ

一　一二三四五の香、各二包充、都合十包出香とす。

一　初炷五包一二三四五、後炷五包一二三四五と分ちて、初炷五包は順の通り一炷充焚出し、後炷五包は打交て不同に成る様に、一包充取て焚出し、十包皆焚終て包紙を開くべし。

一　各無試十炷香の例に聞て札を打べし。

四の香に　ウの札打」御三六ウ

五の香に　（一）（三）と二枚充打べし。

一　記録点は、独聞二点、二人より一点充也。同香二炷結ざるは点かけず、中に非らず。一炷も聞中ぬは、過怠に、聞の下に哥を書べし。初五炷の札数は最始より認置てよし。認様左のごとし。

（二行分空白）」御三七オ

新時雨香記

〔表〕」御三七ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

一
二
三
四
五

2－×＝5
1

5……初「試様」
……後

本香[*]には、「一」「二」「三」「四」「五」の香、各二包、計十包を用意する。そして、「一」から「五」の香を一包ずつ、計五包の二組（初炷[*]・後炷）に分ける。初炷は、「一」の香から順に一炷ずつ焚く。香を焚く順序が指定されていることにより、初炷の五包が、後炷の前の試[*]香の役目を果たすことになる（構造式には「試様」と示した）。後炷は五包をよく交ぜて、初炷の出[*]香順とは異なるようにして、一炷ずつ焚く。十包すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十[*]炷香札を用いる。「一」「二」「三」の香には、それぞれ「一」「二」「三」の札を、「四」の香には「ウ」の札を打[*]つ。また、「四」の香には、「一」「二」の札を、「五」の香には「三」「ウ[*]」の札を、二枚組み合わせて打つ。

記録には、「一」から「五」の初炷五包の札の数を、始めから記しておいてよい。通常は、出香の順に香名を千鳥に書く（斜めに右から左へと互い違いに書く）が、本組香では、初炷五炷を縦並びに記し、後炷をその左側に、やはり縦に並べて書く。点は、独[*]り聞きでは二点、二人以上聞き当てたときには一点ずつである。初炷と後炷とで同[*]香を二炷とも聞き当てなければ得点にならない。すべて聞き違えた場合には、「過怠」（罰）として、記録の最下段に歌一首を記す。

なお、本伝書は、「新時雨香」に先立って「時雨香」（射巻―六）を掲載する。「時雨香」については、『社会科学』第47巻第3号を参照されたい。

（2）和歌作品との関わり

冒頭に掲げられている歌は、『後拾遺集』巻第六冬、三八二番に載る。「時雨香」が拠った歌と同じである。

落葉如雨といふ心をよめる　　源頼実

このはちるやどはききわくことぞなきしぐれするよもしぐれせぬよも

頼実は、秀歌を詠むことができるよう、住吉神社に命を懸けて

祈願してこの歌を得た後、夭折したという（『袋草紙』『今鏡』他）。

本組香では、歌題や歌句を、香名や聞きの名目などにそのまま用いてはいない。だが、初炷・後炷という本組香の構成は、「時雨する夜」「時雨せぬ夜」の対に依拠した趣向か。また、通常、記録に和歌を記すのは「褒美」としてであるが、本組香では、すべて聞き違えた場合に歌一首を記す。これは、「落葉」の音と「時雨」の音とを「聞き分くことぞなき」（聞き分けることができない）という、聴覚によって詠まれた和歌表現を、聞香にあてはめて用いたものであろう。

《御巻―一七》三詠香

【翻刻】

△（朱）三詠香

一　十炷香の札を用。

一　雪の香（二朱）、月の香（二朱）、各三包充、花の香（ウ朱）一包（ウ香也）、都合七包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一　雪月の香、外に拵へ試に出す。花香は試なし。

一　地香六包の内、一包取除け、花の香加へ、以上六包を二炷聞に焚出す。除たる一包を最始に一炷聞に焚出し、」御三八オ

其次に二炷聞を三度に焚出す也。

一　最始に出たる一炷を、詠の題と名付て出し、夫に合せて記録の口に其題の哥を認るべし（雪の香なれは雪の哥を。認る。月花ともに同じ）

一　二炷聞名目、左のごとく認る。

雪〳〵（朱）　ふる雪　　月〳〵（朱）　月影

雪月（朱）　山の端　　月雪（朱）　雲井影　」御三八ウ

雪花（朱）　冬こもり　　花雪（朱）　よする波

月花（朱）　夕やみ　　花月（朱）　かすむ夜

（朱）名目引哥六首　　左大臣

玉葉集
雪ふれは山の端しらむ明かたの雲間に残る月のさやけき

後花山院内大臣　」御三九オ

新千載集
冴わたる雲井の月も影そへて九重ふかくつもる白雪

紀貫之

古今集
雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そ咲ける

大納言俊明

續拾遺集
うちよする波に散かふ花見れはこおらぬ池に雪そつもれ

る」御三九ウ

人丸

続古今集
夕やみはあなおほつかな月影のいてばや花の色もまさらん

民部卿為明

新続古今集
かすむ夜の光を花と匂ふにそ月の桂の春もしらるゝ

（朱）詠題の哥三首」御四〇オ

藤原敏行朝臣

後撰集雪の題
降雪のみのしろ衣打きつゝ春来にけりとおとろかれぬる

大納言経信

新古今集月の題
月影のすみわたるかな天の原雲吹はらふ夜半の嵐に

紀貫之」御四〇ウ

後撰集花の題
春ことに咲まさるへき花なれは今年をも又あかすとそ見る

記録、地香独聞二点、二人より一点充、客香独聞三点、二人より一点充、詠題の一炷は何人聞にても三点充也。聞違星二つ充附るべし。猶認様左のごとし。

（一行分空白）」御四一オ

三詠香之記

月影のすみわたるかな天のはら

雲吹はらふ夜はの嵐に

〔表〕」御四一ウ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法

雪
月　3コ－1…初「詠の題」
花　1　6＝2×3

本香には、「雪」「月」の香（地香）、各三包、「花」の香（ウ香）、一包の計七包を用意する。「雪」「月」の地香のみ、試香を行う。

地香六包から一包を取り出し、「詠の題」と名付けて、まず最初に一炷聞きにする。次に、地香の残り五包に「花」の香一包を加えて六包とし、二炷聞きを三度行う。七包すべてを焚き終わってから包紙を開き、正答を披露する。

答えには十炷香札を用いる。「雪」「月」「花」の香について、それぞれ「一」「二」「ウ」の札を打つ。

記録には、二炷目以降は、二炷聞きの香の組み合わせにより指定されている、八つの聞*きの名目のうちのいずれかを、聞き当てたか聞き違えたかに関わらず、すべて記す。そして冒頭には、初炷の「詠の題」の香が「雪」の香ならば「後撰集雪の題」の歌を、また、「月」の香ならば「新古今集月の題」の歌を書く。

記録点は、初の一炷「詠の題」は、聞き当てた人数に関わらず三点であるが、聞き違えると星*を二つ付す。その他の香については、独*り聞きの場合、地香は二点、客*香は三点とし、二人以上聞き当てた場合は、地香・客香を問わず一点である。

（2）和歌作品との関わり

本組香では、聞きの名目のもととなった「名目引哥六首」と、記録に記すための「詠題の哥三首」が、出典とともに示される。これを手掛かりに、以下、それらの和歌の題や詞書、歌番号などを、『新編国歌大観』に照らして確認する。なお、便宜上、「名目引哥六首」には順に①～⑥の番号を付した。

▽「名目引哥六首」

①　雪歌中に　　左大臣

雪ふれば山のはしらむ明がたに雲まにのこる月のさやけさ

『玉葉集』巻第六冬歌、九六〇番

②　冬歌中に　　後花山院内大臣

さえわたる雲井の月も影そへて九重ふかくつもるしら雪

『新千載集』巻第六冬歌、六九九番

③　冬のうたとて　　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞさきける

『古今集』巻第六冬歌、三二三番

④　堀川院御時鳥羽殿にて、池上花といへる心を講ぜられけるに　　大納言俊明

うちよする浪にちりかふ花みればこほらぬ池に雪ぞつもれる

『続拾遺集』巻第二春歌下、一一五番

⑤　題しらず　　人麿

ゆふやみはあなおぼつかなつきかげのいでばやはなのいろもまさらん

『続古今集』巻第二春歌下、一二九番

⑥　延文百首歌たてまつりける時、春月を　　民部卿為明

かすむ夜の光を花とにほふにぞ月のかつらの春もしらる

『新続古今集』巻第一春歌上、九三番

まず「名目引哥六首」であるが、名目「山の端」「冬ごもり」「よする波」「夕やみ」「かすむ夜」は、①③④⑤⑥の和歌の語句を採り入れている。また、和歌の中に、①「雪／月」、③「雪／花」、④「花／雪」、⑤「月／花」、⑥「花／月」の語が詠まれて

おり、この順に、二炷聞きの香の出方が対応している。また、名目「ふる雪」は、①「雪ふれば」、名目「月影」「雲井影」のふたつは、②「雲井の月も影そへて」に拠って、名目として語句を整えたと見られる。「雪／雪」「月／月」の香の出方に、名目「ふる雪」「月影」が充てられていることについての説明は贅言を要しまいが、「雲井影」を「月／雪」の香の出方の名目としているのは、前述①、③～⑥の名目と同様、②の和歌に詠まれた語の順に拠るものである。

▽「詠題の哥三首」

正月一日、二条のきさいの宮にてしろきおほうちきをたまはりて　　藤原敏行朝臣

ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろかれぬる

『後撰集』巻第一春上、一番（巻頭歌）

永承四年内裏歌合に　　大納言経信

月かげのすみわたるかなあまのはら雲ふき払ふよはの嵐に

『新古今集』巻第四秋歌上、四一一番

兼輔朝臣のねやのまへに紅梅をうゑて侍りけるを、三とせばかりののち花さきなどしけるを、女どもその枝ををりて、すのうちよりこれはいかがといひいだして侍りければ

春ごとにさきまさるべき花なればことしをもまだあかずとぞ見る

はじめて宰相になりて侍りける年になん

『後撰集』巻第一春上、四六番（巻末歌）

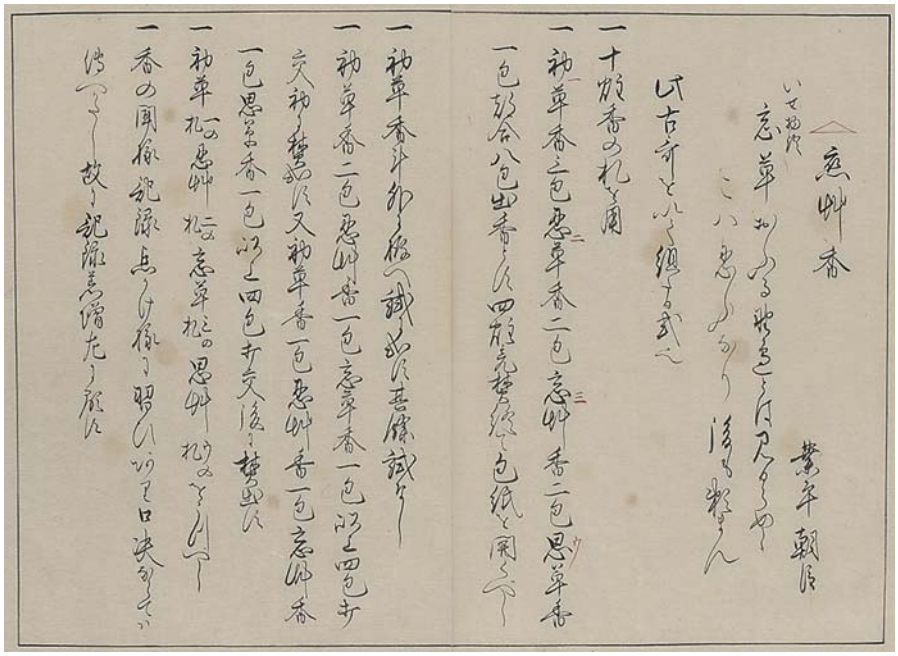
「詠題の哥」として列挙されるのは、右の三首の歌である。「詠の題」の香は、「雪」か「月」であるので、記録に書く歌として、「花」の歌は不必要であるはずだが、「三詠」として整えたかったのであろう。「雪」と「花」の歌に、『後撰集』春上の巻頭歌と巻末歌が用いられている点にも注意したい。なお、『後撰集』四六番「花」の歌の作者を「紀貫之」とするのは、『後撰集』において直前に配された四五番歌の作者「つらゆき」を、当該歌の作者としても認めたものであろう。『貫之集』にも、「藤原のかねすけの中将さいさうになりてよろこびにいたりたるに、はじめてさいたる紅ばいををりて、ことしなん咲きはじめたるといひいだしたるに」（七〇六番）という詞書で、当該歌は収められている。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題

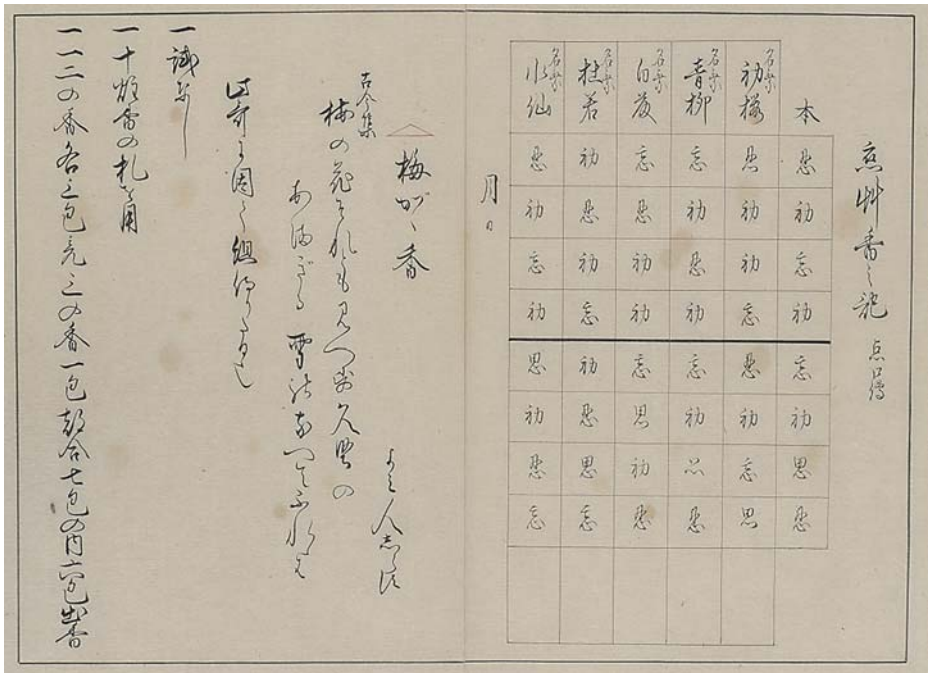
番号16K00469、いずれも二〇一六～二〇一八年度）における研究の一部である。

【影印】　綴じ糸を外し、袋綴じを一丁ずつ開いて撮影したもの。



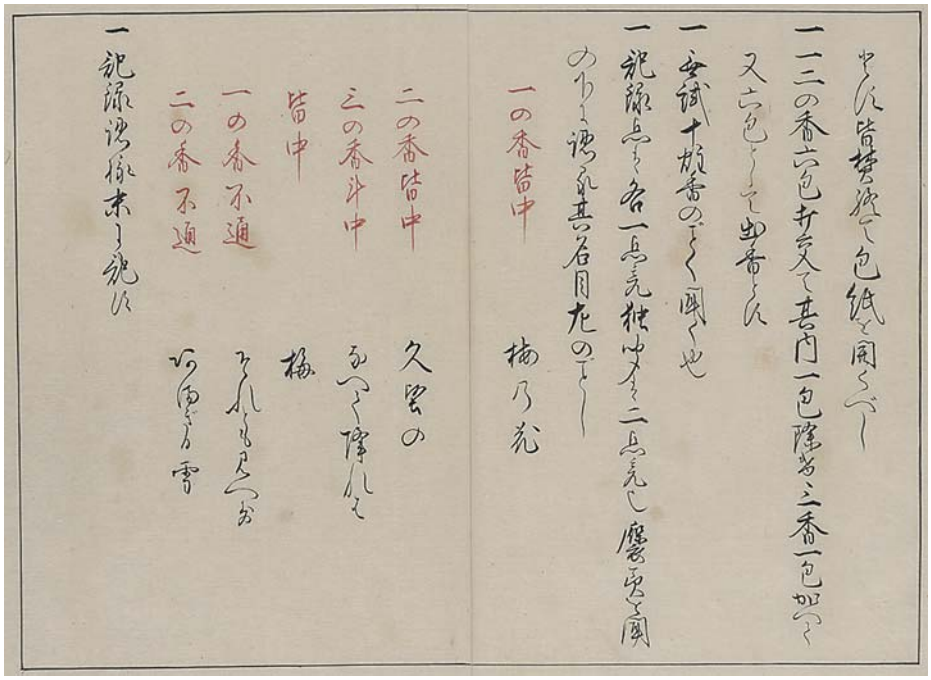
（御・二五丁表）

（御・二五丁裏）



（御・二六丁表）

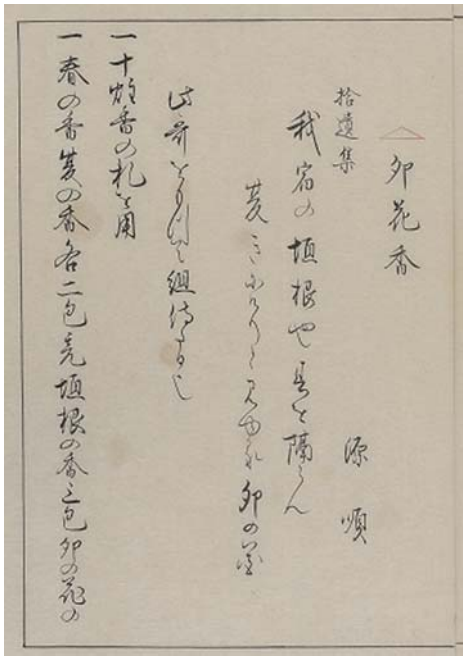
（御・二六丁裏）



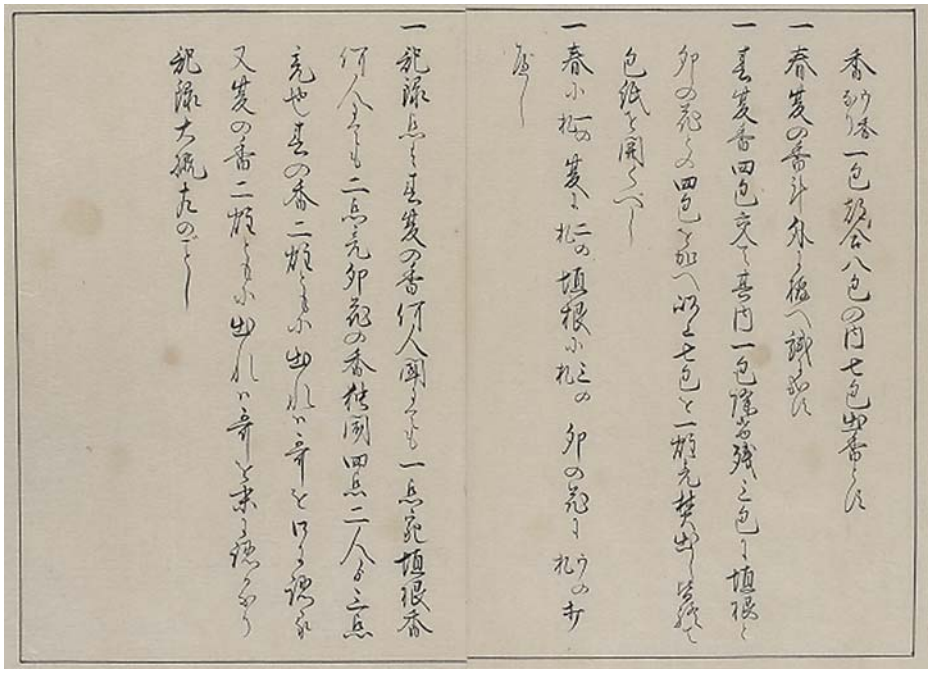
（御・二七丁表）

（御・二七丁裏）

（御・二八丁表）

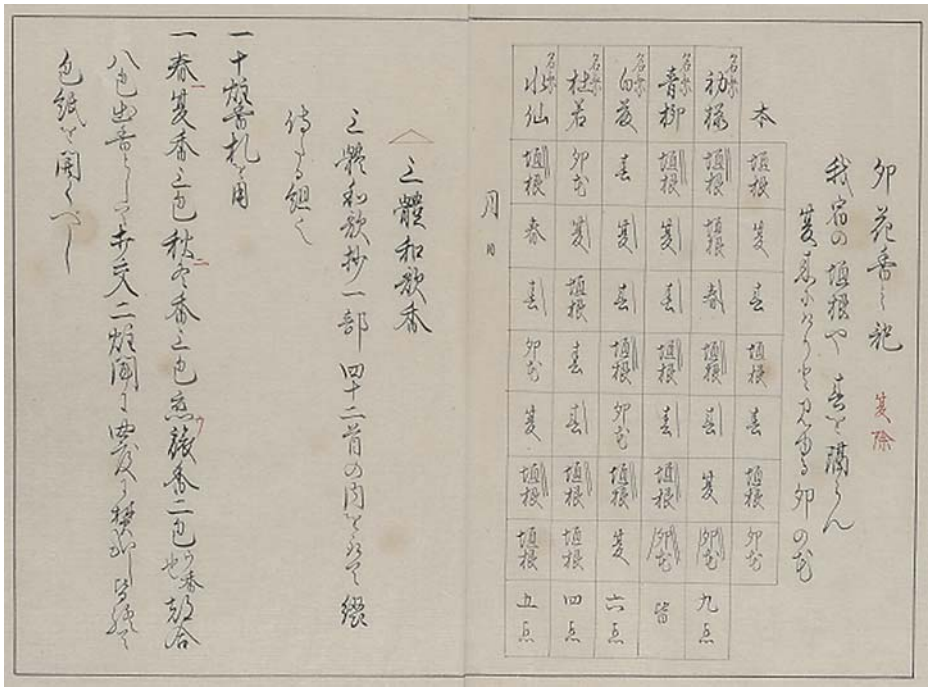


（御・三〇丁裏）



香の物香一色 合八色の内七色出番こゝ
一春菱の番汁水こゝ極へ御成
一春菱番四色交て喜内一色隆番殘こゝ色こゝ植根こゝ
卯の花こゝ四色こゝ加へ此こゝ七色こゝ一帖元禁出こゝ紙こゝ
色紙こゝ風こゝ
一春小松の菱こゝ松の植根小松こゝ卯の花こゝ卯の月
こゝ

一就源氏こゝ菱の番何人風こゝ一点宛植根番
何人こゝ二点宛卯花の番何人風四点二人こゝ点
宛也喜の番二帖こゝ出れい幸こゝ徳こゝ
又菱の番二帖こゝ出れい幸こゝ徳こゝ
就源氏流こゝ



卯花番こゝ就　菱除
我宿の植根や喜こゝ満こん
菱こゝ小こゝ也こゝ加こゝ卯の花

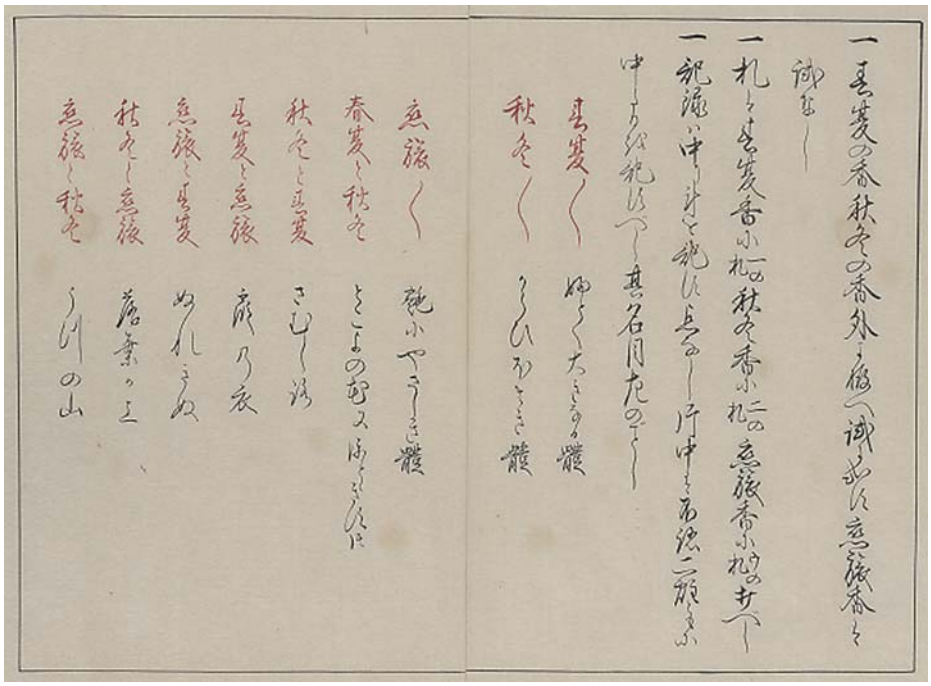
本

植根	菱	喜	植根	喜	植根	卯花		
植根	植根	植根	喜	植根	菱	卯花	九点	
植根	菱	喜	植根	喜	菱	卯花	皆	
植根	菱	喜	植根	喜	植根	卯花	六点	
植根	喜	植根	植根	植根	植根	植根	四点	
植根	喜	植根	植根	植根	植根	植根	五点	

名水 初橘
名水 青柳
名水 白菊
名水 杜若
名水 小仙

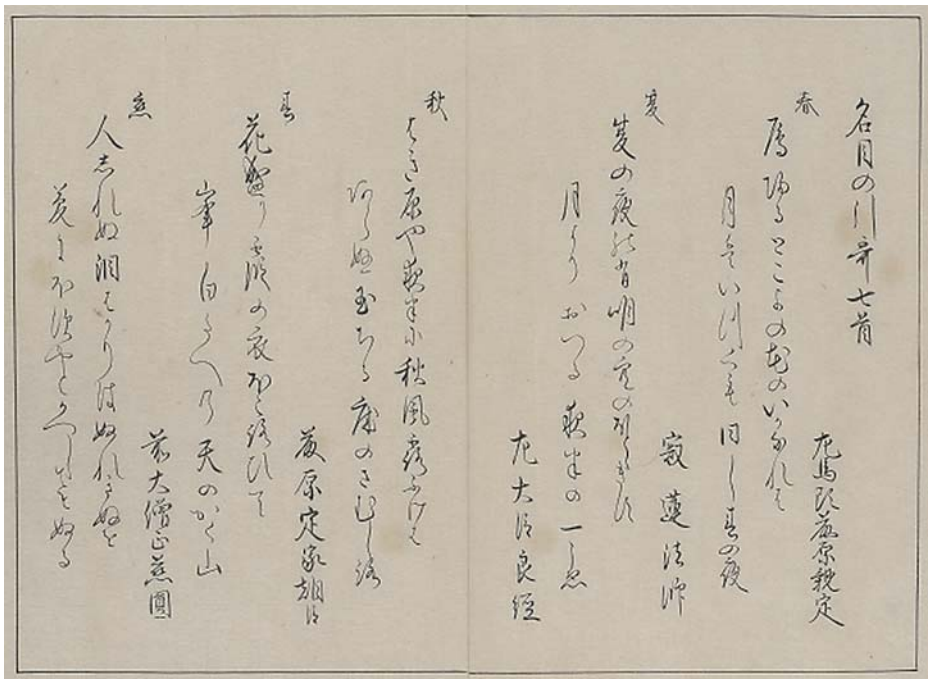
月 日

〈之體和歌香
之體和歌抄一部四十二首の内こゝ小こゝ
結こゝ組こゝ
一十盤番札こゝ用
一春菱香之色 秋こゝ香之色 恋こゝ殘香二色 也こゝ香 加合
八色出番こゝ 十六人二帖風こゝ出菱こゝ 殘こゝ 紙こゝ
色紙こゝ風こゝ



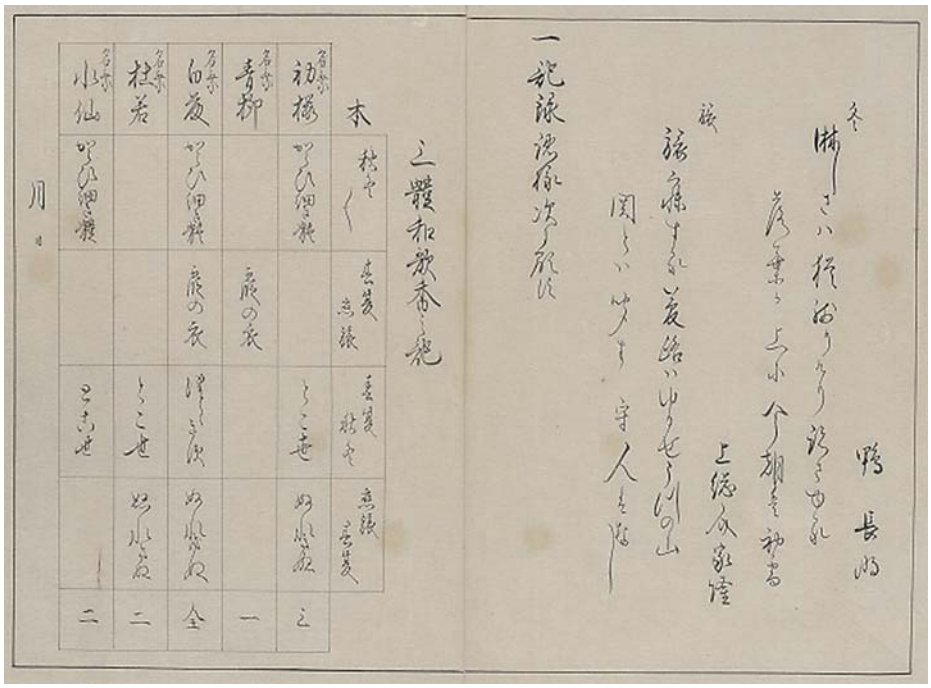
（御・三三丁表）

（御・三三丁裏）



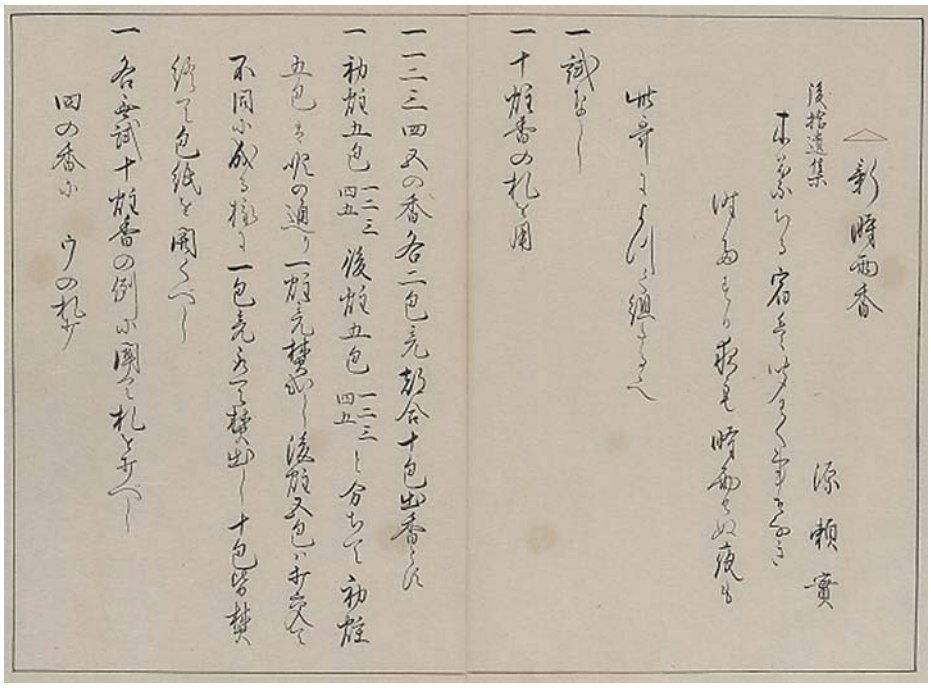
（御・三四丁表）

（御・三四丁裏）



（御・三五丁表）

（御・三五丁裏）



（御・三六丁表）

（御・三六丁裏）

五の香ハ　一ウ　二　三　と二度たき

一　紙線香を他国二点二人より一点宛に同香二度焚

すべき点の時は中ハ断に成一度も国中ハ宛を三点

小ハ少の内に弁と書ハ　初又壁の札数を定名より

漏る事なし　漏る度なし

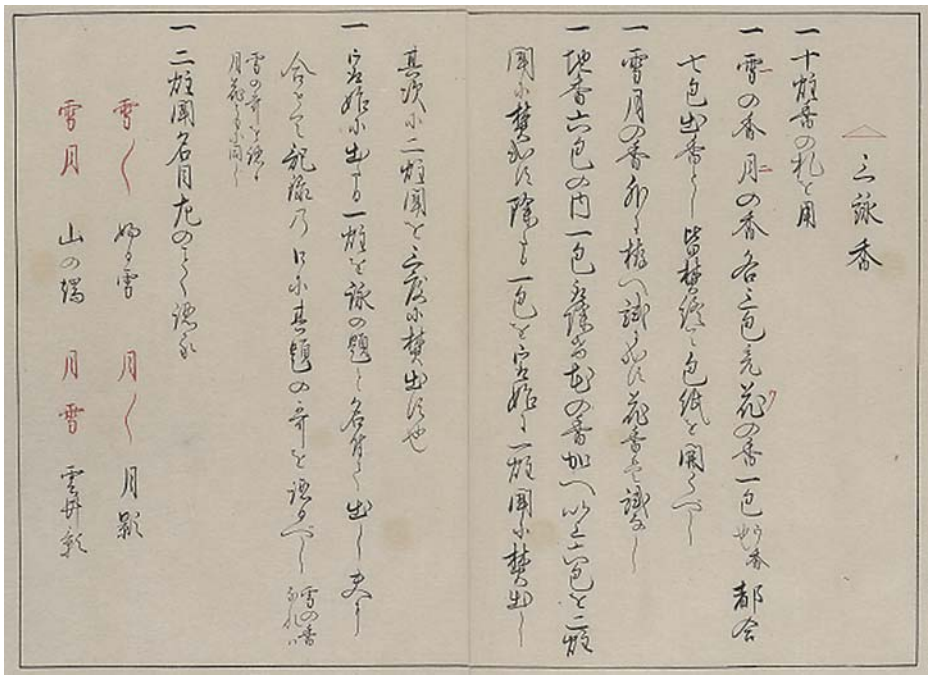
新附の香銘

木							
初橋	一	二	三	四	五	一	谷
青柳	一	二	三	四	五	一	六
白菊	一	二	三	四	五	一	六
杜若	一	二	三	四	五	一	名所ちくさくさ沢山あるもまた名所也
水仙	一	二	三	四	五	一	六

年号月

（御・三七丁表）

（御・三七丁裏）



〈　三線香

一十数番の札と用

一雪の香　月の香　各三包　元花の香一包　妙香　都合

七包出番〳〵　皆横線と色紙と用〳〵

一雪月の香　初〳〵橋　御　花　番と御

一他香六包の内一包　名籠の香加　（少と二包）と二度

風に焚　次隠る一包と宛名　一度風に焚出〳〵

真次に二度風と宛に焚出る也

一宛名に出る一度を線の題〳〵各番〳〵出〳〵夫〳〵

合と　紙線乃　に小真題の弁と漏る〳〵　雪の香

雪の弁と漏る　月名〳〵同〳〵

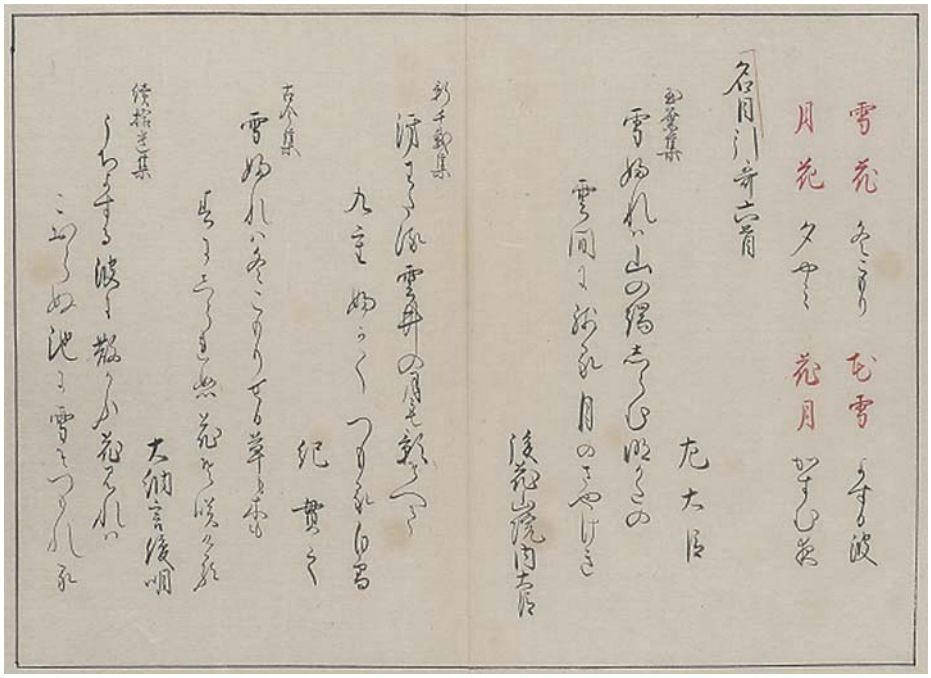
一二度風名目左の〳〵漏る

雪〳〵　炉の雪　月〳〵　月影

雪月　山の端　月雪　雪舟絵

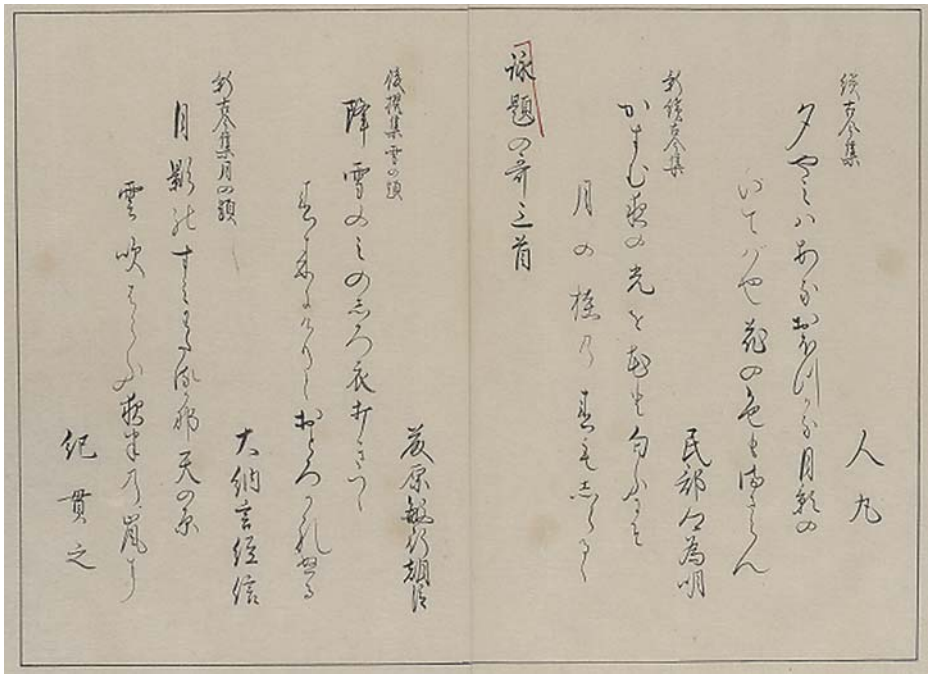
（御・三八丁表）

（御・三八丁裏）



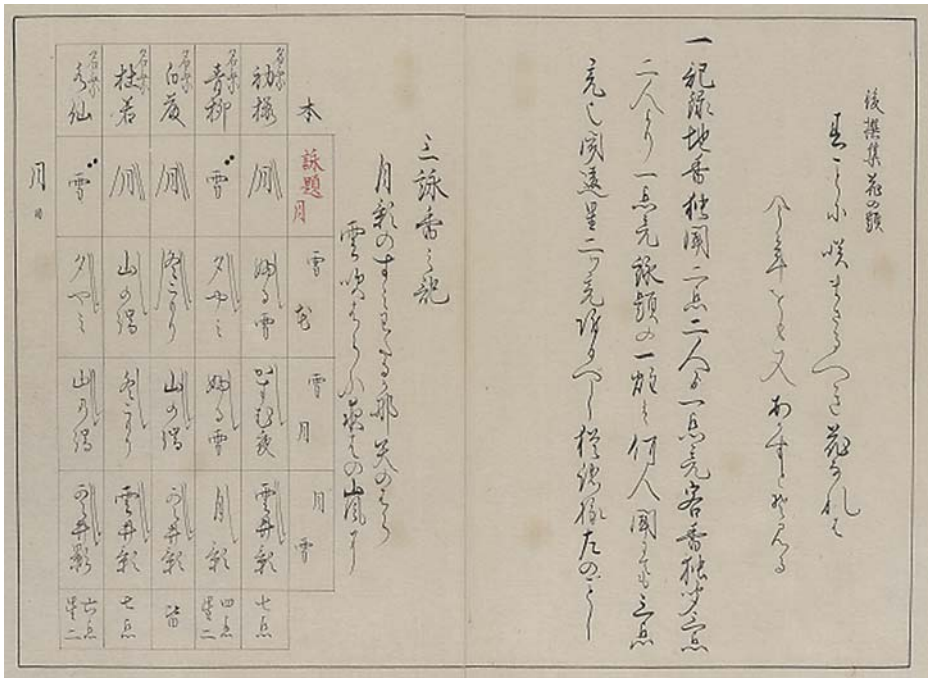
（御・三九丁表）

（御・三九丁裏）



（御・四〇丁表）

（御・四〇丁裏）



（御・四一丁表）

（御・四一丁裏）